

# ゲーテの「植物変態論」と「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代」

——「イタリア紀行」を中心として——

国 分 義 司

「植物変態論」<sup>(1)</sup>の成立および論文発表は「ウル・マイスター」<sup>(2)</sup>と「修業時代」<sup>(3)</sup>の中間に位置し、植物変態論の形成がイタリア旅行中であつたことともあいまって、その関連性はしばしば指摘されるところである。それ故ゲーテが「植物変態論」の完成と「マイスター」の改作の問題について「イタリア紀行」<sup>(4)</sup>の中で直接触れているところがあつて然るべきであると考えられた。そして確かにゲーテがその関連について述べているらしい箇所も、ほんのわずかではあるが見られる。たとえば「イタリア紀行」の1787年3月22日の項で、ゲーテは「ヴィルヘルム・マイスター」について、この作品の「多分最後の数章のなかに」イタリアの雰囲気伝えることになるだろうと述べた後で、さらに次のように記述している。

「それが出来るぐらいにまで私の生活が発展して、茎が伸び、花がいつでも豊かに美しく咲くといいのだが。私は生れ変つて帰るのでなければ、むしろこれきり帰らぬ方がよほどましなのだ。」<sup>(5)</sup>と。

そして、それより3日後の3月25日には、植物学研究上のすばらしい啓示を受けたことを報告するとともに、次のように述べている。

「原植物に関する私の研究は間もなく完成する……子葉に関する私のすばらしい学説は何人もそれ以上に説き進めることが出来ない程洗練されて

いる。」<sup>(6)</sup>と。

この「ヴィルヘルム・マイスター」についての記述とそれに近い日に述べた植物研究についてのゲーテの記述を組み合わせて、両者の関係を即座に関係づける気持は毛頭ない。ただここで興味があるのは、これらの記述の日付が、ゲーテのイタリア旅行中の日記に見られる日付と異なっていることである。即ち前記の「マイスター」についての記述は、日記では同年の2月10日となっており、植物についての記述は5月27日となっている。つまり「マイスター」についての記述は1ヶ月以上も遅らせ、植物研究の成果については約2ヶ月前にその完成を予測しうるよう組み立てている。5月27日という日付も、この日付はその直前の5月17日にはゲーテがパレルモの植物園で、念願であった原形植物を発見した直後であり、しかもこの日には、日記の中で「マイスター」に言及して次の様に述べている。

「九月の月上旬に出来たらフランクフルトに着いていて……恐らくヴィルヘルムと他の2、3の作品を仕上げるために、しばらく母のもとで過ごせし、そうなればずっと肩の荷を降ろせることになるでしょう。」<sup>(7)</sup>

これらのことを考慮すると、むしろゲーテは、あまりにも直線的な当時の日記の中での表現を、後にある程度詩的に、あるいはわかりにくく変えたとも考えられるし、彼がのちに、「イタリア紀行」編集の際に幾度か、日記に書いたものを削ったり日付を変えたりしたことは、それらをゲーテが秘そかに関連づけようとしたか、あるいは逆にその関係を隠そうとしたかは別にして、かなり意図的だったとはみてとれるのである。

次に注目すべきことは「イタリア紀行」の中でゲーテは、植物研究及び自然研究一般は必ず人間研究と結び付くものであり、同時に自然の法則を知ることは、芸術形式の法則を知ることであるという主旨のことを繰り返し述べている。特に彼が日記の中で「マイスター」について言及し始めた時期、すなわち1786年9月20日～22日直前に、例えば9月8日には自然界

の模型について、87年2月10日の言及の直後の2月16日には自然界の事物と芸術上のそれとの連関についてそれぞれ次のように記している。

「私は世界を創作するために、これまでいろんなものを獲得した。けれどもまったく新奇な、または意想外な、というものはまだ何もない。……自然界においてはそれを指差して人に示すことのできないようなものを、ありありと人の眼に映して見せることのできる模型というものについても、いろいろと夢想した。」<sup>(8)</sup>

「自然界の事物は、芸術上のことと何ら変りはない。それについては今までずいぶんと書かれてきたが、自然を眺める者は、それを再び新しい連関の中へ組み入れることができる。」<sup>(9)</sup>

これらはいわば、主として植物研究の結果得られた、特に「原植物」の発見過程で得られた観念であり、この図式を「マイスター」の改作と関連づけて考えたとしても決して遠く外れることはないだろう。しかしこれを単に「マイスター」だけにとどめず、他の詩芸術にも広げなければならないという意図をゲーテがもっていたとすれば、彼が「イタリア紀行」の中でこれに関連して「マイスター」のみを持ちだすことをためらったとしても当然の事とも考えられる。しかしこのことから植物研究から得られた新たな展望を、さしあたりゆきづまっていた芸術作品「マイスター」の新たな理念として用いることが考慮されていたことは示されている。

ここまでですでに、ゲーテが自然科学研究の成果を彼の文学の骨格に据えようとする意図は明確であるが、「イタリア紀行」の中で、「植物変態論」の構想の確立の後に更にもうひとつ「マイスター」との関連で注目すべきことが語られている。それはゲーテ自身の造形芸術に対する関心の、もしくは情熱の転換についてである。まずゲーテは、マイスターについて次のように述べている。

「私は種々の芸術について考察する機会が非常に多かったので『ヴィルヘルム・マイスター』は膨大なものになっている。が、まず古いものから

かたずけてゆかねばならない、……私の頭のなかには新しいものがおびただしくしまっているが肝要なのは思索ではなく製作である」<sup>(10)</sup>

ついで絵画について、

「私が絵を描き、芸術の研究をするということは詩的創作の可能性の一助とするものであり、それを妨げるものではない。何故なら、ほんの少し書くために、とても多くスケッチしなければならないのだから。」<sup>(11)</sup>

つまりゲーテはイタリア滞在中に、造形芸術に関与するには、自分は歳をとりすぎている。……自分は詩的創作のためにこの世に生まれついているのだということに自覚するに至り、彼の比較的長いローマ滞在から、造形芸術を放棄するか、せいぜい詩芸術の一助にする程度のものにするに至る。そしてこのゲーテ自身の造形芸術からの離脱と同様に、改作された「マイスター」の主人公は演劇という一芸術から離脱するに至った。イタリアでの植物変態論の研究と完成は、ゲーテに多様な、可変的な自然＝人生＝芸術性の図式を想定させ、彼の長編小説に新たな方向を与えることになった。ここからも彼の「修業時代」の成立は「植物変態論」の成立に依拠していることの輪郭がほぼ得られる。

「マイスター」と「植物変態論」の関係についてゲーテ自身が直接述べた言葉が「イタリア紀行」の中に見られるかどうかを見てきたが、これはもともと両作品の関連性を論ずる下記の研究計画の *Einleitung* の一部に当てる意図を持ってなされたもので、それをもってのみ両作品の近親性を求めることを意図していない。「イタリア紀行」の中にその関係を、更に詳しく探究するには、むしろそこで述べられている植物に関する論文以外の諸論文に表われた思想の転換を、それが後年に書き直されたものであることも考慮しながら個々に検討してゆくことの方が、マイスター改作の諸問題の中心点に到達することになるかも知れない。事実ゲーテはこれについて次のように述べている。

「私は自分自身や他人のこと、世界および歴史について種々考察をめぐらす機会を得たが、それについては多くの、斬新ではなくとも有益なことを、私の流儀にしたがってお伝いするであろう。そして結局は、『ヴィルヘルム』の中に全部表現され、包含されるだろう。」<sup>(12)</sup>

個々の検討は後日に委ねることにして、ここでは研究計画を、すでに着手、公表しているものをも含めて、その項目を列挙するに留める。

Über Goethe's „Wilhelm Meisters Lehrjahre“ im Zusammenhang mit seinem Aufsatz „Die Metamorphose der Pflanzen“.

0. Einleitung.

1. Die Entstehungsgeschichte von „Lehrjahre“ und von den Aufsätzen über die Botanik.
  - a. Die Entstehungsgeschichte von „Urmeister“ und „Lehrjahre“
  - b. Die Entstehungsgeschichte von „Die Metamorphose der Pflanzen“ und die Geschichte Goethe's Studiums über Botanik.
  - c. Die Fragen über Goethe's Umarbeitung von „Meister“ in Zusammenhang mit seinem Studium über die Botanik.
2. Über Goethe's Hauptideen, die in seinen Aufsätzen über die Botanik bezeichnend sind.
  - a. Über die Hauptideen von „Die Metamorphose der Pflanzen“.
    - 1) Ursprüngliche Identität aller Pflanzenteile. Urpflanzen.
    - 2) Die regelmäßige, unregelmäßige und zufällige Metamorphose.
    - 3) Das Wachstum und die Fortpflanzung.
  - b. Die Ideen in Goethe's anderen Aufsätzen über die Botanik.
    - 1) Eine Höhere Maxime des Organismus und das bewegliche Leben der Natur.
    - 2) Bildung und Umbildung organischer Natur.
  - c. Die literarische Ausdrucksweise in „Die Metamorphose der Pflanzen“.
    - 1) Die Anschauung und die Bewunderung.
    - 2) Ausdehnung, Zusammenziehung, Verwandtschaft und Anastomose.

- 3) Der literarische Begriff von Goethe's Morphologie.
3. Die Lebensgeschichte und der Charakter der Personen von „Lehrjahre“.
- a. Die regelmäßige Bildung und Umbildung der Personen in „Lehrjahre“.
- 1) Die Bildung und Umbildung einer schönen Seele, ... die Einführung eines Lebensstyps.
  - 2) Die Bildung und Umbildung des Helden bis zum fünften Buch von „Lehrjahre“.
  - 3) Die Lebensgeschichten von Aurerie, Serlo, Lothario und den anderen Personen im Vergleich zu der von Wilhelm.
- b. Die zufällige oder unregelmäßige Bildung und Umbildung.
- 1) Die Umbildung, die in Goethe's Interpretation von „Hamlet“ bezeichnend ist.
  - 2) Die Geschichte von Sperata-Augustin=Mignon.
  - 3) Das Leben von Mariane.
- c. Die poetische Zusammenziehung, Verwandtschaft und Anastomose.
- 1) Der Harfner, Mignon, und Felix.
  - 2) Die geistige Anastomose zwischen Natalie und Wilhelm.
4. Zusammenfassung.
- a. Goethe's „Lehrjahre“ als die höhere Maxime des Menschenlebens.

注

- (1) „Versuch die Metamorphose der Pflanzen zu erklären“ 1790年成立。
- (2) „Wilhelm Meisters Theatralische Sendung“ 1777年ごろ起稿, 1785年11月, 第六巻完成, その後中断。
- (3) „Wilhelm Meisters Lehrjahre“ 1794年4月着手, 初版1795年1月~1796年5月にかけてウンガー書店より刊行。
- (4) „Italienische Reise“ 第一部, Erster Band (Von Sep. 1786 bis Feb. 1787) 第二部, Zweiter Band (Von Feb. 1787 bis Juni 1787) 第二次ローマ滞在, Zweiter Römischer Aufenthalt (Von Juni 1787 bis April 1788)
- (5) Goethes Werke, Hamburger Ausgabe in 14 Bänden, BAND XII, „Italienische Reise“ Christian Wegner Verlag Hamburg, 1964, S.

27 L. 27 ~35.

- (6) 同上書 S. 221 L. 38~S. 222 L. 6.
- (7) „Johan Wolfgang Goethe, Tagebuch der Italienischen Reise 1786“, Herausgegeben und erläutert von Christoph Michel, Insel Verlag, Inseltaschenbuch 176, S. 219, Brief an der Herzog, Neapel, 27. Mai. '87.
- (8) „Italienische Reise“ S. 17, L. 1~6.
- (9) 同上書 S. 171, L. 10~12.
- (10) 同上書 S. 366, L. 12~20.
- (11) 同上書 S. 446, L. 2~4.
- (12) 同上書 S. 411, L. 32~37.

(1983年6月24日受理)